

## 深むし茶の生産地

### 菊川町(静岡)を訪ねて

#### 本誌編集部

静岡県といえば富士山とお茶が連想されるように、お茶の生産地として有名ですが、菊川町はその中で深むし茶の名産地として著名で、品評会でも多くの賞を獲得されています。その菊川農協に茶業指導課長坂部静雄さんを訪ね、深むし茶について種々お話をうかがった。

#### 「菊川町の農業概要」

菊川町は静岡市、浜松市の間位置し、日本一の大茶園地帯牧之原台地を擁する菊川河畔にあり、人口約26,000人の静かな町である。

農家人口は約12,000人で、農業生産額の概要は表1のようである。圧倒的にお茶が主体で、いかにお茶に力を入れているかがわかる。茶の生産推移の概要は表2に示したとおり、菊川のお茶は、その品質の良さから着実に面積を拡大しつつある。



坂部静雄さん

#### 1. 農業生産額

農業粗生産額 (百万円)

総 額 8,753 (53年)

① 茶 5,208 "

② 畜産 1,373 "

③ 米 1,178 "

#### 2. 生葉・荒茶生産量粗生産額

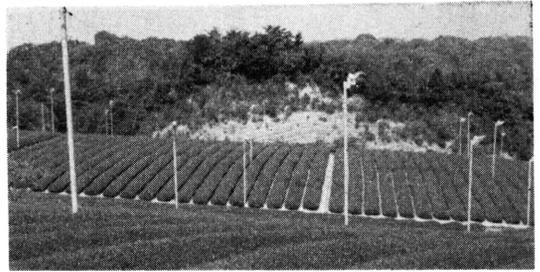
年度	生			茶			茶粗生産額計	農粗生産額	右に示れる茶粗生産額の割合
	栽培面積	生産量	10a当り収量	粗生産額	生産量	粗生産額			
40	882ha	10,907t	1,237kg	538百万円	2,590t	274百万円	812百万円	1,830百万円	44%
45	973	12,331	1,363	1,530	2,934	584	2,114	3,866	55
50	1,150	14,255	1,341	2,938	3,291	1,169	4,107	7,440	55
53	1,230	15,310	1,320	3,810	3,419	1,399	5,209	8,753	60

#### 「深むし茶について」

「ふかむし茶というのはどんなお茶なのですか」とお聞きしたところ、「蒸気で蒸す時間を長くしたもので1分～1分半位蒸します」とのこと。この蒸す時間が重要で、従来の浅むしでは得られない風味が出るそうで、「深むしすると、茶葉の樹脂質が破壊されて砕け茶や粉になりやすいが、その分、渋みがとれて、甘味こくが増えます」とのことであった。

「菊川のお茶は、その昔、葉肉が厚いので中級品とし

菊川の茶園 (霜害ファンが設置してある)



て扱われていた」という。当時の製茶技術では葉が厚い菊川の茶を味のよい茶には仕立てられなかったらしい。篤農家の皆さんがもっとうまいお茶をと研究されたとのことで、一言で言えば、茶葉の物性に着目した品質改良の成功例ということになるだろうが、現在の名声を確保するまでに20年も必要としたと聞けば、良質な葉の生産一蒸し一製茶に到るまで、数多くのノウハウの蓄積を必要としたことが考えられ、まさに菊川の深むし茶は技術のかたまりと思われた。

菊川町の茶業の繁栄は、「深むし」技術の開発と共に、茶業の発展は栽培から製造まで一貫して省力化された近代的な協業化茶工場の設立が重要であるとの結論を着実に実現してきたことにある」と坂部さんは指摘されている。製茶の協業化工場で町内で収穫された生葉の大部分が荒茶に生産され、中央の菊川農協で再製から冷蔵保管までを受けもち、今では1,300トンもの冷蔵保管能力を保有して、お茶の需給調整に大きな役割を果たすようになってきているとのこと。お茶の品質向上への努力と共に、製茶のコストダウンを追求されてきた所に、現在の菊川のお茶の名声と繁栄があるとの感を強く持った。

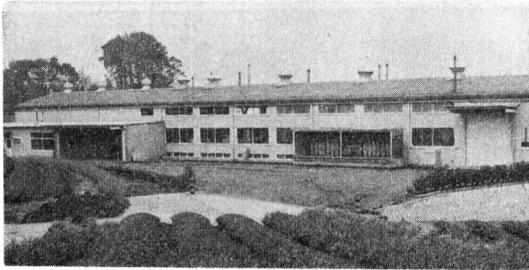
茶業指導課は製茶工場の経営についての相談指導から、茶園造成、良茶生産のための施肥の指導と多彩な活

動を展開されている。いわば技術センターとしての機能が最大限発揮されている。

菊川町では盛んに茶園が造成されている。現在では1,300haを超えていることから、茶に対する農家の期待がいかに大きいか判る。

「その中で一番重要なことは良質な茶葉を生産できるような土づくりである」と、坂部さんは指摘される。「深むしとして味のすぐれたお茶作りをすすめて、ゆるぎない地位を保つには均一な良質葉生産が大切である。そのために土壌調査、土づくりに力を入れており、特に土づくりには、有機質を投入して土壌を肥沃にし、良質

製茶工場の遠景



の茶生産につないでいる」菊川町周辺は頁岩土が多く、開植のためには、有機質による土質改善が重要なのである。最近菊川町も兼業化が進行しており、土壌調査による適切な施肥指導には非常に気をくばっておられるようであった。

茶業指導課では農家の皆さんに茶園管理の要点を理解していただくために、やさしくかみくだいた「茶園管理の要点」というパンフレットを作製されている。農家と密着した茶業指導課の運営は本当に素晴らしいと思う。

さて、深むし茶は菊川のお茶の葉肉が厚いことを利用して作られる。栽培のポイントはいかにして良質の葉肉の厚い葉をとるかにある。そのためには、茶樹に力をつける必要がある。上記のパンフレットにも、秋に健全な茶樹が一番茶の生産にいかにか大切であるかが示されており(図1)、この点に施肥の重点がおかれている。

すなわち、有機質で地力の維持をはかりつつ無機肥料で茶樹の生育樹盛を確得し、次年度の多収を意図した施肥設計が立てられている(多収2号)

摘採は茶樹にとっては大きな痛手で、そのショックから早く回復させることが大切である。一番茶刈取り後樹盛を回復させるには、吸収のよい、早効きのくみあい燐硝安加里(ふかみどりとNK201)を使っているとのことで、アンモニア態チッソと硝酸態チッソをバランスよく含む化成肥料で、効果を十分引き出されていると感じた。

更に特筆すべきことは、省力緑4号と名付けた省力、省肥栽培を意図した施肥設計が組まれていることである。「お茶の施肥のコツはいかに、チッソ、リン酸、カリを持続して吸収させるかにあり、それが省力省肥につながる」と坂部さんは考えておられる。すなわち、本施

肥設計では、年4回施肥でかつ、持続して肥効成分を供給すべく設計されたものである。この施肥設計に採用されている「ロング肥料」とは、弊社が販売している「くみあい被覆燐硝安加里ロング」のことである。

この肥料は100~360日も肥効が持続する新しい肥料で、各作物に使用して頂いているが、お茶でもすぐれた効果を示すものと、来年のお茶摘みが待ち遠しい。

「菊川のお茶にとって最大の問題は何でしょうか」と質問した所、坂部さんは「霜害の克服」と答えられた。54年の霜害のひどさは記憶に新しい。「何年かに1度しか来ない霜害に対処することは、経済効果の点で難しい問題であるが、すでに防霜ファン設置面積が菊川農協の栽培面積の20%に達した」とのことである。

深むしの製法を生み、今、新しい省力施肥体系にチャレンジし、また、自然を克服しようと努力されているお話を聞いて、菊川のお茶はもっともっと発展すると確信しつつ、記者は菊川農協を辞去した。

図1 茶の秋芽と一番茶の生育

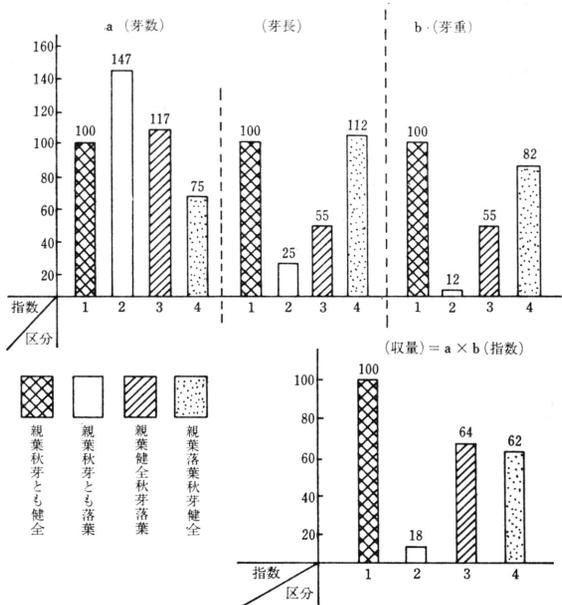


表3 菊川農協の代表的施肥設計

種別	成分			秋肥(1)	秋肥(2)	春肥(1)	春肥(2)	芽出し	一茶時	一茶後	二茶直前	二茶直後	三茶直後
	N	P	K	8月	9月	3月上旬	3月下旬 4月上旬	4月中下旬	5月上旬	5月下旬	6月上旬	7月上旬	8月上旬
多収2号	124.0	40.8	65.2	菊川有機(8袋)	有機化成S280(5袋)	菊川有機(8袋)*	土の素有機(5袋)	硫安(4袋)	ふかみどり(4袋)	NK201(3袋)	硫安(4袋)	かおり(4袋)	アズミン苦土(5袋)
省力緑4号	87.8	48.6	50.6	菊川有機・ロング肥料(8袋)(12袋)		菊川有機・ロング肥料(8袋)(10袋)		硫安(4袋)		緑風(4袋)			